

NEXT VISION

日本学校メンタルヘルス学会 第15回大会

「学校の居心地のよさを求めて—東日本大震災から学んだこと」



「学校の居心地のよさ」を求めて

日本学校メンタルヘルス学会（以下、学会）は、学校で子どもにかかわる教職員や青少年保護・育成活動に携わる人々、研究者、教育行政関係者といった幅広い分野の人材が集まり、意見や情報を交換し、研究成果を発表しあう場です。今年度の学会は、メインテーマを「学校の居心地のよさを求めて」と設定しました。また昨年から決まっていた開催日程が偶然にも東日本大震災から1年後という祈念日にあたるため、サブテーマを「東日本大震災から学んだこと」としました。

東日本大震災では多くの子どもが身内や近い人の死と直面して、強いストレスがかかりました。通常、PTSDは3か月ほど経過し

多くの子どもがメンタルヘルスに問題を抱える現代。子どもの成育にとって重要な場所である学校のメンタルヘルスを考えることの重要性は増してきている。今回は日本学校メンタルヘルス学会第15回大会長の小林正幸氏に、東日本大震災後の児童のメンタルヘルスから学校が担うべき役割、そして教員と医療者の相互理解に必要なこととは何か、インタビューしました。

たころからさまざまな症状で現れます。しかし東北地方は、児童心理や児童精神医学の専門家がもともと多くなく、また教育現場でも勉強の遅れを取り戻そうと一生懸命で、子どもの呈するPTSDの症状に気づいていないのではないのでしょうか。

医療者が不足しているなか、心に傷を負った子どもを支えるには、地域において子どもにかかわる人数・機会がもっとも多い専門職である学校の先生にがんばってもらう必要があります。また、子どもが健全であるためには、まず教員のメンタルが健全でなければなりません。今学会では、学校が、子どもだけでなく教員にとってもホッとできる「居心地のよさ」について、考えたいと思っています。学校が居心地のよい環境であれば、子どものPTSDや二次障害による学校への不適応、また教員の休職や離職を防ぐことにもなります。今学会のメイン・サブのテーマ設

定は一見、つながりなく思えるかもしれませんが、子どものメンタルヘルスを考えるうでは、遠いものではないと考えます。

多様なプログラムから考える

いまは、問題のある子どもや保護者からのクレームへの対応に教員が疲弊することも多い時代です。今学会では保護者との関係にスポットをあてたものとして、教育学者の小野田正利氏やデパートで長くお客様相談係としてご活躍されてきた関根眞一氏に、クレームへの対応についての講演をお願いしています。学校における居心地のよさは、子ども・保護者・同僚などとの人間関係が順調であることが重要な要因になります。そしてもう1つ重要なことが「自分らしくいられる」ということです。学校の居心地のよさをかたちづくる要因を考えることが、今学会の大きなテーマの1つです。

また、小児病棟の院内学級で

INTERVIEW

こばやしまさゆき 東京学芸大学教職大学院
教授
小林正幸

ホスピタルクラウンとしてご活躍されている副島賢和氏にもご講演いただきます。学校は本来、失敗から多くのことを学ぶ場です。失敗してはいけない、と考えてしまうことで緊張感が高まり、居心地も悪くなるのです。クラウンワークにおいては、たとえばジャグリングの際にわざとボールを落として、相手に“下から目線”でかわりますが、そこには「失敗してもいいんだよ」というメッセージも込められています。副島氏には、このようなクラウンワークの実践と、死と向きあう多くの子どもたちとかわってこられた経験をお話いただきます。ほか、シンポジウムには、災害時に子どもの心のケアを担ってきた小児科医や心理士、グリーフセラピストなどにもご参加いただきます。

今学会では、これらの多様なプログラムを通して、健全なメンタルを保つための他者との良好な関係づくりや、それによって子どもを支えること、そして“命と向きあうこと”を考えていきます。これらの

テーマは教員のみならず、医療者のみなさんにも通ずるところが多いのではないのでしょうか。

医療者と教育者の相互理解を

子ども、保護者だけでなく、被災されたのは教員も同様です。学校で子ども・教員を幅広く支えようと思えば、医療者との密な連携が求められますが、教育現場では精神科に限らず、医療者の介入を避けようとする意識が往々にしてあります。そのため、教員と医療者の間で、子どもの問題を共有できていません。

たとえば、統合失調症や発達障害の顕著な子どもに対して、学校で教員はどうかかかすべきか、してはいけないことは何かなど、医療者からきちんとした説明はなされているのでしょうか。また、子どもが日常的に薬を服用していたとしても、眠くなる、吐き気がみられるかもしれない、といった副作用の説明も、医療者からはほとんどありません。教員と医療者の間で、このような情報提供、共

通理解を深める必要があります。

子どもが問題を抱えていても、中には自分の子どもの問題を受け入れられない保護者もいます。そうすると、施設を紹介しようにも理解と承諾が得られず、教員が困難に感じるが多々あります。力量のある教員は、それぞれの子どもの特性をとらえて受けとめ、独自の工夫をこらして子どもと向きあい、そして医療につなげてくれます。こうした教員のかかわりから、医療者が学ぶことも多いのではないのでしょうか。いまは教育現場においても、問題を抱える子どもへの早期支援や早期介入の機運が高まっています。今後は養護教諭を中心に「保健」の授業において、ライフスキル教育の一環として、メンタルヘルス教育も行われていくでしょう。そのとき、外部の医療者の方にゲストティーチャーとして参加していただくことも考えられます。多くの医療者の方に今学会にご参加いただき、学校メンタルヘルスを促進する一助となってほしいと思います。

INFORMATION

日本学校メンタルヘルス学会 第15回大会

【日時】2012年3月10日(土)～11日(日)【会場】国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都渋谷区)

【内容】理事長講演/学会長講演/シンポジウム「学校の居心地感のよさを求めて」「東日本大震災から学んだこと」/ワークショップ「教師のためのクラウンワーク」/講演「なぜか怒られる人の話し方、許される人の話し方」「涙も笑いも力になる」「教師のメンタルヘルス—教師はなぜ落ち込むか」/対談「いのちの教育を考える」/ほか

【参加費】会員:4,000円(事前申し込み)、当日:5,000円/非会員:5,000円(事前申し込み)、当日:6,000円/学生:2,000円

【問い合わせ】事務局 FAX:042-329-7695 e-mail:soudan@u-gakugei.ac.jp